原　著

漱石『門』における愛の限界
―訪れた出来事をどの様に受け止めるのか―偶然・・その副詞的意義

戸田　由美

＜要　旨＞

作品『門』は、『三四郎』『それから』につづく中期三部作品として並び称せられるものである。この中期三部作品たる由縁は、主人公の経験が編成されてゆくところにある。自然の愛は『それから』において回復され『門』においても続くが、偶然（自然）は一方で愛をはぐくむと同時に過去の因縁を含む。その２つの偶然性が作品では矛盾を起こし個人主義の建て前は崩れてゆく。そして作品『門』においてその帰結を示すものであると思われるが、本稿では中期三部作品の関連をも鑑みながら、漱石作品の何が現代人のこころをとらえるのか、その意義と現代人へのメッセージを個人主義の本質からその副詞的意義とともに究明するものである。したがって、その偶然性（自然）にかかわりつつ、それを超える問題にふれることが本論のねらいである。

キーワード：個人主義、愛、偶然（自然）、副詞、中味と形式

１、はじめに

作品『門』の世界を解明する前に、三部作品『三四郎』『それから』『門』の主人公のこころの編成を辿る必要がある。明治42年朝日新聞の予告を見る限り少なくともつづきものとして関連するという意味は確かであるが、それぞれの作品がどのようにして作品『門』へと移行していくものなのか。＜つづく＞とはどういうことなのか。つまりは、その人生観とその行為を表現する媒体としての言語構造の関連性を解明してゆきたいのである。作品『三四郎』に関しては詳しくは[(1)]西南女学院短期大学紀要第38号をご笑覧いただきたく思う。作品『それから』においては接続詞のそれからと作品名の一致する面白さ等々、ことばのもつ、しかも日本語のもつ言語的エネルギーがどのように作品『門』へ繋がるものなのか。考察を重ね、合わせて『門』の世界を窮明してゆきたい。

『それから』[(2)]予告

色々な意味に於てそれからである。「三四郎」には大学生の事を描たが、比小説にはそれから先の事を書いたからそれからである。「三四郎」の主人公はあのとおり単純であるが、比主人公はそれからである。比主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いてない。比意味に於ても亦それからである。

明治42, 6 ,21『東京朝日新聞』

２、愛と個人主義の矛盾(1)

作品『三四郎』に引きつづき明治42年朝日新聞に連載された『それから』は、職のない長井代助が三千代を、夫、平岡から奪おうとする葛藤を多角的な面から、一種の「戦い」として捉えた、云わば、初めから困難至極なストーリーとして展開される。代助は、中学時代からの友人である平岡の妻（三千代）を愛し続けていたのである。三年前、ただ「友だちの本分」という理由のみで平岡の為に三千代を周旋した代助は、三千代への思いを断ち切れず今に至るが、平岡の一身上による金銭の不如意を知り、三千代を不幸にする平岡に対する不満と、新婚旅行に立つ寸前、彼に対する「憎らしい思い」が同時に募り今更のようにその愛は燃え続けることになる。代助が三千代に対する愛を自覚するのは平岡常次郎が東京へもどるという葉書きがきっかけであった。それから代助は「重い写真帖を取り上

西南女学院大学短期大学部保育科　准教授

げて」「二十歳位の女の半身」を「じっと」「見詰める」。決して三千代とは書かれていない。女という表現、突然という表現は、それ以前に意識されていたということでもあるが、その意識が念頭にのぼってくるのは、平岡の上京という意識が無意識のうちに沈潜していて偶然によってよびさまされてゆくことである。たとえ代助が三千代を好きであっても条件がなければいけない。つまり愛は偶然によって引き起こされてゆく。しかし父を始めとする「家ノモノ」は、よもや代助が他人の妻を愛しているなど知る由もなかった。「月に一度は必ず本家へ金を貰いに行く」代助に、父、長井得を始めとする「家ノモノ」（父、兄、嫂、子供たち計五人）は「佐川の令嬢」との縁談話を進める。この結婚にしたがうならば「独立の出来るだけの財産」が父から与えられることになっていた。しかし代助は断り続ける。代助の理由なき縁談拒否に父は怒り、月々の出支を止めると言う。今こそ必要なものは金銭というときに。ところが代助は「世の中が悪」く「日本対西洋の関係が駄目だから働かない。」と言い、さらに「生活の為めの労力は労力の為めの労力でない」つまり「食う方が目的で働らく方が方便だからその労力は墜落の労だ」といって、職に就こうとしない。以上の点に作品『それから』の代助の＜葛藤＞、＜諸矛盾＞がみえる。したがって代助があくまでも自分の実生活を保ってこの世の中に一服する職業を求めるのならば愛を捨てなくてはいけないということになる。「自然の児になろうか、又意志の人になろうか」と代助が迷う根拠はその様なところにある。以上の＜矛盾＞を、＜愛における自然＞を重視した場合と、＜個人主義（金銭面）＞に重きを置いた場合の「代助と家族」・「代助と平岡」という「葛藤」の視点から考察してみたいと思う。

「家ノモノ」は言わば代助の「敵」として描かれている。父、長井得は「儒教の感化を受け」ていて「戦争に出たのをすこぶる自慢に」している。そして頭から代助を「小僧視」している。「誠実と熱心」がなければ成功しないという哲学を持っているが、利他本位が何時の間にか利己本位に変わっており、代助が最も苦手とするタイプである。縁談の相手、佐川の令嬢はもとはと言えば政略結婚なのである。

兄、誠吾は日頃は説教めいたことも言わない柔軟な人格であるが決して代助に金銭を貸そうとはしない。平岡からの手紙で最後に三千代の存在を知ると、名誉心から急変して代助を罵倒する。この二人は代助の完全な敵であるが、嫂という存在――梅子には代助はことのほか好意を抱いている。逆に「代助も梅子にかなりの人望があっ」た様である。その証拠に「貴方は寝ていて御金を取ろうとするから狡猾よ」という「命令的な言葉」を代助は「面白く感」じ、「話し相手としては兄よりも嫂の方がはるかに興味があ」った。父のことを梅子と二人で「お父さんの様に言うと世の中で石地蔵が一番偉いことにな」ることをかげで笑い、「御父さんの前では万事控え目に大人しくしているんです」とも言う。（傍点筆者）かと思えば「早くお貰いなさい」「それじゃ誰か好きなのがあるんでしょう、その名を仰ゃい」と父や兄を代弁して代助に迫る。そして兄と嫂は代助を歌舞伎に誘い出して佐川の令嬢と遂に見合いさせる。その反面、梅子はまだ見ぬ三千代のために二百円を代助に貸すのである。だから梅子の態度に代助は「かばわれている様な」あるいは又「疎外されている様な」同時に二つの心境を味わうのである。梅子は、嫁という立場上、父や兄とは性格が違う様であるが、代助に対する金銭面での心情的同情と、一つの家族構成に対する謀反が同時存在するものである。したがって、一見、代助の敵とみなされていた家族という形式は、梅子の代助に対する同情により二つに分かれる。＜一対一（代助対家族）＞であるはずの構図が梅子のなぐさめの行為によって＜一対二＞となる。しかし反面、複数の家族の声を一つにする代弁役として、＜一対複数＞を＜一対一＞にまとめ得る力も梅子には潜んでいたのである。

梅子と代助においては、代助はお金をもらうことによって愛をもらう方向性と個人としての方向性のどちらか二者択一しなければない。代助は、梅子からのお金をそのまま譲渡して個人主義で生きる道を失い苦しむ。しかし苦しまなければ愛をかなえる実質を作ることはできない。また梅子の場合、特に日本の家族という個人の自由意志を認めない封建的な体制をもつ、上下関係でものを支配する集団において父や兄にも仕え、嫁という立場上、相手の立場を尊重しているが、しかし自己の立場を守るという不可侵の約束のうえにたった個人主義はみられない。それは日本語の、主語のない曖昧な主観的な構造とも関係するのであって、共通の場と自分の属する部屋のない明治の住居のあり方、封建的な家族のあり方の中で個人主義が確立しにくいことを意味する。日本は戸主がお金を所有し必要に応じて与えている。したがって貸借関係ではなく扶養する金銭関係で裏打ちされている個人主義は西洋からのものであって、いわれのないお金を渡すのは個人主義ではないのである。

また三千代と代助においては、自然にまかせる愛が

必ずしも絶対ではないことを示している。結婚する意志が、自然が与えたその人に必然的な方向であっても一方で人間というものの価値関係からみてゆくと、自然に生じた愛も制約されてゆく二者択一がそこにある。代助は三千代に、自分のお金でないお金を与えるが自己矛盾をおかしながら個人としての確立を求めようとしているためジレンマに陥る。三千代は三千代で代助からの二百円を自身のために使用しないで生活費にあててしまう。そして結局代助も三千代も同じ様に苦しむというのもひとつの帰結である。前述した様に、代助対家族・代助対平岡という形式的な＜一対一＞が内容的に＜一対二＞へと移行する根拠は、佐川の令嬢か三千代かといった二者択一を迫られる代助と、それに主に関わる梅子と三千代にあった。

したがって梅子と代助の問題は＜金銭と個人主義＞、三千代と代助の問題は＜見合いか恋愛か＞ということにあり、個人主義を重視するときは代助は「嫂の肉薄を恐れ」、愛における自然を重視した場合は「三千代の引力を恐れ」ていたのである。

煎じ詰めると、以上は＜利他本位と利己本位の関係＞にあるといえよう。「君、不二山を翻訳して見た事がありますか。」と問いかけたあの広田先生が三四郎に「偽善を行うに露悪を以てする」ということは「利他本位の内容を利己本位で充たすというむずかしい遣口だ」（傍点筆者）と説明したことと同線上のものである。三四郎はその理論をそのまま美禰子に当てはめてみるが広田先生によれば、「形式だけが親切に適っていて」「親切自身が目的でない」場合を意味するという。つまり利他本位を建て前とするためには道徳的な意味では＜自己犠牲＞となるが、個人主義のためには意味をなさない、ということである。

３、愛と個人主義の矛盾(2)

因みに、＜自己犠牲＞といえば、その精神と愛の本質をとらえたのはとトルストイズムであり、トルストイにおける愛の本質は相手を出来るだけ幸せにすることで―――それが愛の本質であると言っている。顕著な例として戯曲『生ける屍』を掲げることが出来よう。ニコライ・ギメルとエカテクーナ・ギメル夫妻の話である。ニコライが酒に身を持ちくずし遂に二人は離婚の余儀なきに至るが妻のエカテクーナの乞いによって、夫は自殺したとみせかけて自分を未亡人といつわり二重結婚をしたのである。二人はあばかれて裁判に付される。結局中途半端な自己犠牲は相手を破綻にしてしまうということである。日本では自己犠牲を脇から受けとって愛の充実から奪うところまでしたのが有島武郎である。このようにすれば、愛と個人主義は一致するが愛を横から獲得することは女性を道連れにすることになり結末は死に至るのである。相手の愛を尊重し自分の主張を受け入れながらうまくいかそうとした折衷主義が武者小路である。現実社会に生かすことを上手に両立させている。だから『それから』は一方では白樺派に流れる。また鷗外が『青年』で利他主義をとなえて＜自己犠牲＞によって確立すると言っているのは『それから』への反応であろうか。

いずれにせよ、利他本位を建て前とすることは、非常に高級な道徳の様に見えるが、相手を悪くしまた自分をも悪くする。だから美禰子が三四郎に「全部お使いなさい」と言ってお金を与えようとしたり、梅子が代助にお金を用立てするのも一見良いことのようであっても、そのお金が代助を逆にしばってかえって梅子に対して義理を生じる。無意識の偽善が梅子にある、ということである。だから、代助と気が合うのである。代助の根本思想「ポテトがダイアモンドより大切になったら駄目である」は、個人の自主性の喪失を意味することで、人間がある価値のために生きるのではなくて命のなぐさめに生きるのはよくないということである。代助の最も求めていたのは「自分が自分のために生きる」ことであった。これが個人主義への志向である。しかし個人主義は前述したように金銭的な定義づけを得て確立するものである。ところが代助の考えて信奉していた個人主義は単なる＜形式＞にすぎなかった。だから金銭の裏付けが断たれたときに彼の個人主義が崩壊するのである。これがいわゆる＜個人主義と金銭問題＞である。その償いとして＜自然の愛＞が残る。つまり三千代との愛である。ただし自然の愛を現実に維持するためには職業の問題が入るわけで、職業についての幻想も沸いてくるが職業が「食うため」であるとすれば、彼の個人主義に矛盾するというわけである。ちなみに、三四郎は美禰子からのお金を返却することによって彼は自分を確立する。そこに個人主義のめざめもあったが美禰子との愛は成立しない。しかし三四郎は学生であったので、代助の様な職業についての問題はない。この点が作品『三四郎』と『それから』の相違点である。

働かない者にはお金を与えず、いわれのないお金を決して渡さない父や兄は金銭的な面での個人主義に拘泥しているのである。梅子や代助の敵になる由縁はこ

こにある。代助は＜金銭＞においては父と兄、＜愛＞においては平岡という敵と戦いながら、この利他本位と利己本位の狭間で＜一対一＞から＜一対二＞となる中味と形式の矛盾する論理に苦しめられ「脳の中心から半径の違った円が頭を二重に仕切っている様な心持ち」になりながらも、それが「頭の内側と外側が、質の異なった切り組み細工で出来上っているとしか感じ得られず」何とかして「二つのものを混ぜようと力め」たのであった。（傍点筆者）そしていよいよ「結婚は道徳の＜形式＞に於て自分と三千代を遮断するが道徳の＜内容＞に於て、何等の影響を二人の上に及ぼしようもない」と思うに至る。その時はじめて代助は＜「自然の昔」＞に帰ることを決意するのである。矛盾に苦しめられた末のこの結論は、何を意味するのか。代助のこころにどのような変化を及ぼしたのか。作品『それから』のメタ・メッセージとして考えられることは、つまりは、利他本位と利己本位、中味と形式の矛盾の根本要因はひとえに＜自己犠牲＞であったということである。代助が自身の本心をおさえて平岡に三千代を譲ったことそのものにある。その矛盾に気づいたことこそが＜自然の愛の回復＞である。このように見ると、作品『それから』における家族という一つの＜形式＞を、金銭関係で裏打ちされた個人主義という一貫した西洋的なものの見方でもって考察しようとしたとき、あにはからんやその＜中味＞が真なる個人主義ではなく日本的見地での＜自己犠牲＞を含んでいるものであったため、そのつまずきが＜諸矛盾＞となって表面化したのである。西洋的形式における日本的中味とでも解釈できようか。ものの見方という観点においての西洋と日本。同時成立のむずかしさがここにある。愛を獲得することも愛における＜自然＞を重視することで科学的精神に繋がるものであり、恋愛結婚として男女が愛しあうのが西洋の影響であるが、個人主義と愛とはうまくかみ合わないのである。愛は利他本位でもなく利己本位でもなく、一つのものに強固するときに男女の愛がある。＜自己犠牲＞することもなく西洋の＜形式＞にもとらわれないあの頃の日本で純粋なる＜おのずからなる愛＞を――というのが代助の求めたあの＜決意＞である。＜「自然の昔」＞に帰ること。これは、形式にとらわれなければ中味は融合してゆくものだと語った漱石の思想に一致する。

> （前略）私は是を生活の内面に伴ふ調和と名づけて決して矛盾の名を下したくない。矛盾に違いないが夫は単に形式上の矛盾であって内面の消息からいえば却って生活の融合なのである。（中略）要するに、形式は内容の為の形式であって、形式の為に内容が出来るのではないと云訳になる。
>
> 明治44年８月堺において「中味と形式」と題する講演より

漱石はその為に日露戦争の例を掲げて、戦争の形式だけが形式の上でまとまった丈ではむしろ不安でたまらないことを説明し、「経験の裏書を得ない形式はいくら頭の中で完備してゐると認められても不完全な感じを興へる」と述べている。「事実と衝突する論理は、自己に無関係な命題を繋ぎ合わして出来上った、自己の本体を蔑視する、形式にすぎないと思った」代助が自然の愛を獲得することは、本来ならば形式上で言えば個人主義を捨てる、個人主義の崩壊となって敗北を意味するところ、即座に「職業」を探しに出かける様子は、父や兄、平岡との戦いに＜形式的＞に＜負けた＞かの様にみえてその実、＜中味＞は三千代を＜獲得する＞ことであり＜勝利＞を意味しているのである。この＜負けて勝つ＞ことが代助としての利他本位を利己本位に充たす方法であり、作品『それから』の意味でもある。そこには何らの矛盾もない、西洋という＜形式＞にとらわれない日本古来のすがたが醸し出されているともいえよう。またひいては日本古来の知行合一の王陽明の思想に共通するものともいえよう。「おのずから」としての自然に注目した[(3)]九鬼周造氏は日本文化の主要な契機として、自然と意気と諦念の連関をつぎのように掲げられる。

> 自然といふおのずからな道は一方に於て生きる力の意気といふ動的な迫力と、他方に於て明かに諦める諦念という静的な知見とを自己の中に措定してゐる……

[(4)]相良亨氏も世阿弥の『[(5)]金島書』を引き「あきらめは日本人の伝統的な死生観の最も根源をなすものであるが、それがおのずからとしての自然観によってはじめて可能であったこと」そして、「ここに云うあきらめは、今日、日常的な場で云われる消極的なものではなく、精神的な緊張の高い」ものであり、「武士が強調し、その行動性の精神的な心構えとした覚悟」、「肯定しつつもなおそれを思い切る」のがまさに「あきらめ」であるといわれる。ここに掲げた代助の生き方に相通ずるものがあるように思う。作品のなかでは代助と父の思想は切り離せないものとして描かれているが、多分に保護的な受与である金銭の保護に甘えていると個人主義的な自己確立は出来ないのである。この中に捨てがたい暖みがあるが、漱石はそのようなものに魅かれながらけじめをつけている。矛盾への開放、代助の人間的成長を経て作品『それから』は『門』へ

つづく。しかしながら、それではなぜ、作品『門』において愛は限界なのか。以下は、「偶然」（自然）をめぐる第二の問題を少しく考えてみる。

4、作品『門』の世界

作品『門』においても＜偶然性＞のもつ意義は極めて重要である。愛の＜自然＞は何か、ということが愛とは何ぞやであり、＜自然＞と＜偶然＞は同じで、先に述べたように愛は＜偶然＞によって引き起こされてゆく。＜自然の愛＞こそ本当の愛であり、愛の本質を『それから』ではつかむのであった。そして三千代を獲得したが、この様なおのずからして沸きあがってくる気持ちを形象化してゆくもの、愛の＜自然＞を維持する格好として『門』の宗助とお米がいる。そして『門』もその愛が＜自然＞でつらぬかれている。ただ重要なことは、愛自体問題はないがその愛が『門』においてうまく本人の幸福と結びつかないということである。それが何故かと考えることが『門』における愛の限界を意味する。つまり宗助とお米の育くんでいる愛の不毛は何故かということである。宗助とお米はいたって仲の良い夫婦として登場する。

宗助は社会的に代助とは異なり就職するものの、何か満たされない官吏である。お米は子どものいない、子どものできる見込みのない妻である。また、金銭的に渇望している宗助には小六という弟がいる。ある夜中、お米は、枕元で響いた音で「不図眼を」開ける。そのときすでに隣の坂井さん宅に泥棒が入っていたが、その事件がもとで坂井氏と宗助は意気投合しつきあいを始める。そしてその後、坂井氏は宗助に安井を紹介するが偶然にもこの人物こそ、まさしく宗助お米夫婦の過去の亡霊なのであった。この＜偶然＞の出来事があらためて過去のあやまちを彷彿とさせる展開となったのである。実はその当時、安井のつきあっていた女性こそがお米であり、その上安井の前で宗助とお米とは突然出会い、そして二人は不義をおかすが、そのおかし方まで自然であった。この泥棒事件という＜偶然＞の出来事は、宗助とお米の＜あの頃とこの今＞とをひとつにさせたのである。

したがって＜偶然＞というものは一方で愛を育むと同時に封じ込められていた過去をも引き出すものなのである。お米は子どもが出来ないことに関して「人に対して済まない事をした覚がある。その罪が祟っているから」だと易者に言われ、また宗助にも「子供さえあれば、大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と「突然語調を更えて」さとされるのであった。この過去は本人同士の愛情の外側にあるものである。つまり因縁の問題であり、自責の念である。その処理をどうするかということで不和になったりもする。だから愛というものは、夫婦だけで守ってゆくことのできない外との関係にあることに気づいてゆくのが『門』である。因縁は決して論理で考えることはできない。どの様に受けとめるかである。その受けとめ方として次の二つが掲げられよう。

(1) 一つの単なるただの現象として考える場合（客観的）
(2) 自分を中心に考える場合（主観的）

(1)はたとえ社会主義的刺激がすきま風の様に入ってきても、それにおびやかされない精神の確立が求められる。外側からの圧迫や影響をありのままに受けとめ、それに対して外との、外についての判断をしない、＜判断停止＞の世界にならざるを得ないということである。いわゆる理想の世界である。

(2)は、純粋な自然の愛で貫つらぬこうとすることである。(1)の様に客観的に見れば理想と現実の狭間に苦しみ、(2)の主観的な方法だけでは世の中はうまくやってゆけない。宗助は、禅の精神によって因縁の糸をたち切ろうとしてそこに救いを求めて宗教の門の中に入ろうとするが論理的分別が邪魔をして自分を忘れることができなかった。論理ですべてが処理できない矛盾に達したのである。宗助が悟りを得ることができなかった原因はここにある。自分自身にこだわり保身となり自分を解放出来ない。つまり低回趣味の崩壊である。下記の夫婦の会話に示されるように、ものの本質というものは、ひとつの字が視点の当て方によって色々読めるのと同じ様に全体像がうかびあがるものだが、座標軸を何本引いてもわからないということである。

「御米、近来の近の字はどう書いたっけね」と尋ねた。（略）
「近江のおうの字じゃなくて」と答えた。
「その近江のおうの字が分らないんだ」
「どうも字というものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。
「何故」
「何故って、幾何容易い字でも、こりゃ変だと思って疑ぐり出すと分からなくなる。この間も今日の今の字で大変迷った。紙の上へちゃんと書いて見て、じっと眺めていると、何だか違った様な気がする。仕舞には見

れば見る程今らしくなくなって来る。――御前そんな事を経験した事はないかい」

すでに作品冒頭文において、その手法に挫折があるということが暗示されていたのではなかろうか。つまり愛の問題というものは自分の守っている小さな世界だけでは解釈できないということである。ここに至ってもやはり愛と個人主義はうまくかみあわないのである。『三四郎』の世界の[6]推移趣味を残して低回趣味はここで崩壊する。したがって『門』においては何の解決も出ないということになるが、だからこそ、＜考えないで見る態度＞――＜分別を捨てる＞、その側面が用意されていたことは確かである。

５、おわりに
――偶然性（自然）の孕む問題について――

――主客同時成立のむずかしさ――

このように『それから』から『門』の愛は、継続する自然の愛の流れる面と、論理で押してゆく面との調和を通して考察してはじめて、そこに愛の限界があることに気づかされるのである。偶然性の孕む問題を考察することによって、そこからくる主客同時成立の問題があるゆえに愛の神話はくずれ、すなわち個人主義の建て前は崩れることになる。個人主義的思想は西洋近代の産物であるが、金銭、友人夫婦など西洋近代のもたらした悲劇をみる思いがする。＜自然の愛の回復＞に目覚めた代助が、帰る決意をした＜自然の昔＞とは、日露戦争以前の西洋の資本主義的志向のない、日本における純粋な＜自然＞である。小説のなかでは「雲の様な自由と水のごとき自然」と描写されている。翻ってみれば、小説の内容としては――ふと、不意に、突然――といった自然の愛は＜副詞＞によって導かれるが、視点を換えて、その愛が西洋の個人主義的志向のなかで育まれることなく、中味も形式もごくごく純粋な日本的な＜おのずからなる愛＞として成立するにはどうすればよいのか、という未来的テーゼを逆に投げかけた場合、もっと明快にみえてくるものがあるのではないか。個人主義と愛、主観と客観、目的と方便それぞれが矛盾するということは、そこに横たわる西洋と日本の思想の土壌の相違、立ちはだかる文化の壁、あるいは言語構造の相違、があることを如実に語るものであり、かえって、相容れない根源的理由を考察する必要がありはしないかと考えるものである。したがって、中期三部作品の流れは、＜自然＞というものを発端に＜二つの機軸＞に支えられている、と考えられよう。一つの骨子は＜言語とはなにか＞という文法的視点で作品を解明しようとするながれ、二つめは、＜愛とは何か＞、という小説の内容を把握する視点で作品解明する機軸。それらが大きく交錯しつつ文明批評しながら次の世代に生きる人々へ生き方の方向性を示しているのではないかと思う。したがって、前述しているところのいわゆる＜副詞＞のもたらす問題点はそのまま＜生き方＞への考察を示しているように思えてならないのである。

[4]相良亨は「おのずからとしての自然」の中で、「自然という翻訳後の定着は日本の文化史上の一つの出来事」であると指摘する。確かに従来自然は、「おのずからな」「おのずからに」という形容詞、副詞として用いられてきたことは周知の事実であるが、氏のことばを借りるならば、「自然という翻訳後の定着は、明治及び明治以降の日本人の、また明治に流れ込んだ日本の伝統的な山川草木観、いわゆる日本人の伝統的な自然観の質をはしなくも示す」ということである。ということは、この「おのずからとしての自然を以て山川草木の総称とすることを許容する」思想的土壌は、キリスト教を基盤とする欧米の見方とは根本的に異質であるということである。

図らずも漱石はこの問題について、すでに作品『三四郎』において問うている。（詳しくは第38号紀要をご笑覧頂きたいが）

広田先生が三四郎に「君、不二山を翻訳したことがありますか」と尋ねる箇所がある。

「不二山を翻訳する」ということは、広田先生流に説明するならば、

みんな人間に化けてしまう

みんな人格上の言葉になる

ということであった。主語はいずれも「自然」である。「やま」を英訳すると「mountain」になるというのとは違い、ここでは決して「翻訳すると」という表現に幻惑されてはいけないのである。例えば「富士山」を見て「[7]崇高」を感じる。それがここでいう「翻訳」なのであって実際は「崇高」を感じて初めて「翻訳」したことになるのである。「翻訳する事の出来ない輩には自然が豪も人格上の感化を与えていない」（傍点筆者）とあ「輩」が「人間」を指していることを確認する必要があるのではないかと思う。だから確かに「偉大さ」や「崇高さ」は客観的であるが、そこには美的範疇が純粋な客観になるかあるいは「崇高」を感ずるから美が成立するか、といった美の客観性と主観性の

存在のあり方に「同時成立」という難しさがあるので、主観性をぬきにしては翻訳の成り立たない「日本語」と客観的構造をもつ「外国語」との致し方ない問題点を広田先生がここに提起したのではなかろうか。

また作品『それから』では、前述した代助の自然＜副詞＞に加えて、西洋的なものの見方をすれば発展するものの、その実、形式にとらわれて西洋一辺倒になると日本の良さを見失い矛盾が出て進歩がない危機をテーマとし、漱石は、さらにそれを言語の域にまで達しさせようとしたのである。『三四郎』の＜それから＞だから『それから』というのも形式的に外国語で翻訳してしまえば､すでにそこには＜それから＞と『それから』の一致はなくなってしまう。小説の題名が『それから』というのも実は漱石の私たちに対する一種の謎解きアプローチであったのかも知れない。中味と形式の一致を＜接続詞＞にのせてものの見事に、しかもさりげなくアピールしている。ここでもまた、小説の内容は見方を変えれば、品詞、文法論へと発展してゆくのである。この様な形で漱石は愛の限界をとらえ、『三四郎』につづいて西洋と日本が調和するための方法論的考察が『それから』となり、そして『門』において因縁をたちきることを大問題として、考えないで見る態度を、つまり分別を捨てるその側面を用意したのである。作品世界の登場人物の生き方は何らかの形で表現され、生きていくための方法論的表現が言葉や文法と深く関わっていく――、即ち、中期三部作品は、別名――漱石版＜文法白書＞なのではなかろうか。

＜参考文献・註＞

1、戸田由美「君、不二山を翻訳して見た事がありますか――漱石『三四郎』小論－『研究紀要』（西南女学院短期大学）38、1991

2、『それから』予告、明治42, 6,21、『東京朝日新聞』

3、『九鬼周造全集』第三巻所収、岩波書店刊　（「日本的性格」）

4、相良亨「おのずから」としての自然季刊「日本の美学」10、1987ペリカン社

5、世阿弥『金島書』「日本思想体系」

「抑かかる霊国、かりそめながら身を置くも、いつの他生の縁ならん。うしや代雲水の、すむにまかせてそのままに、衆生諸仏も相犯さず、山はをのづから高く、海はをのづから深し、語り尽くす、山雲海月の心、あら面白や佐渡の海、青山満目、なををのづから、その名を問へば佐渡といふ、金の島ぞ妙なる。」

6、明治41年10月１日の「早稲田文学」で、漱石は次の様な事を語っている。

「三四郎」は長くなるというのですか。然うですね、長く続かせるのですね。（略）若し小説を離れて写生文となると面白味は直線的の興味は甲を去って乙になる所が主だから､乙が注意の対象になる。之に反して低回趣味の方は事相其のものに執着するのだからして興味の中心が却って甲にある。即ち乙に移りたくないといふ姿がある。だから比の２つの趣味はどうせ相まかなって行かなければ完全な趣味の起こる訳はない。早く甲が乙に変じて呉れれば可いと思う様では甲自身が厭きられてゐるのだから作物としてはそこに欠陥がある。（略）従って比かき方はエキステンションと直線とを合併したもので外の言葉でいふと低回趣味と推移趣味の一致したものに相違ないでせう。（略）それから比の場合に於る直線推移は一道のコーザリテイで発展するから、是非、インテレストの統一を破る憂はない。だから比の書き方は深さを生ずる描きかただと云ったのです。

7、「崇高」とは狭い意味の「美」に対する美的範疇として18世紀以後用いられている概念。この区別を明確にしたのがカントである。「崇高は形を成さぬ対象にも見出される」（『判断力批判』第23節）また「伝ロギノス」も「崇高」について「自然の美の根拠はわれわれの外にもとめなければならないが、崇高の根拠にはわれわれの内に求めればよい。すなわちわれわれの物の考え方が頭に思い浮かべられた自然の中へ崇高性を送り込むのである。」＊この「崇高」と作品『三四郎』の構成上の関わり方がひとつの面白さとなる。

＊本稿は1993年日本文芸学会総大会での口頭発表を加筆修正したものであることをお断りしておく。

The Limit of Love in Soseki's 'Gate'

Yumi Toda

＜Abstract＞

The work 'Gate' is agmired equally as a middle period work following 'From It (それから)'and' Sansiro (三四郎）'.

The experience of the chief character is going to organize the affinity as the middle work. Natural love is restored in 'From It';
'the Gate' follows,but it (naturally)includes past fate accidentally at the same time to bring up love in one.

The two accidental natures cause a contradiction with the work, and the principle of individualism collapses. It also seems that I show the conclusion in the work 'Gate', but study its significance and a message to modern people about the significance of the adverb from the essence of individualism. What of Soseki's work arrests the heart of modern people while taking warning from it within the connection of the Middle three parts of this report.
Therefore, it is the aim of the main subject to mention a greater problem while affecting its accidental nature.

Keywords：Individualism, Love, Accidental (naturally), an adverb, The contents and form

Associate Professor in the Department of Early Childhood Care and Education, Seinan Jo Gakuin University Junior College